

常は約3週間持続し、それらの改善と同時にサイトメガロウイルス（以下 CMV）抗体価の上昇を認め、IgG CMV 抗体 1+、IgM CMV 抗体 4+（ELISA）で、肝生検にて肝炎所見を認め、CMV の初感染による肝炎と診断した。

CMV 感染症は、新生児・幼児に多く見られ、欧米と異なり成人における本症は比較的稀であり本邦の成人例のほとんどは、免疫抑制剤使用時や重症時などの免疫能低下時及び大量輸血後などの報告である。

15) 頸椎骨転移を初発症状とし、二次性 Budd-Chiari 症候群、右房内増殖を示した肝細胞癌の1例

吉田 俊明・横田 剛 (新潟大学第三)
富樫 満・上村 朝輝 (内科)
市田 文弘 (内科)

症例は55歳男性。昭和60年10月より左肩、左上腕に疼痛出現。61年3月、肝細胞癌の骨転移の診断で本学整形外科にてV、VI頸椎骨腫瘍の部分切除および左椎弓根切除術を受けた。4月、原発巣の治療を目的に当科に転科した。HBs 抗原陽性。AFP 28,000ng/ml。肝は正中線臍上3横指。画像診断では右葉全体を占める多結節性の腫瘍を認めた。肝の腫瘍は抗癌剤の動注と2回のTAEにて一時的に縮小を示したが、再度増大した。経過中に頸椎骨転移巣の再発と腸骨への転移を認め、放射線療法を施行し疼痛の軽減をみた。また、末期には肝静脈から右房に及ぶ腫瘍塞栓により腹壁皮下静脈の怒脹と難治性の腹水、下腿浮腫が出現した。62年1月死亡。剖検では乙型肝炎変に合併した肝細胞癌で、門脈本幹、肝静脈、下大静脈、右房腔の腫瘍塞栓と両肺、右房、横隔膜、脾、肋骨、腸骨、胸膜、リンパ節の転移を確認した。

16) 食道静脈瘤止血困難症例に対する Combined Therapy

高木健太郎・清水 武昭 (信楽園病院外科)
塚田 芳久 (同 内科)
吉田 奎介・塚田 一博 (新潟大学第一)
加藤 英雄 (外科)

過去10年間に当科で経験した食道静脈瘤症例は72例で、そのうち止血困難であった8例につきその治療法と予後について検討した。

対象症例の平均年齢は53.8才、男性4例、女性4例、肝硬変症5例、IPH 3例であった。合併疾患を有するものは4例で、胃癌2例、血友病A 1例、真性多血症1例であった。手術歴を有するものは2例で、いずれも胃全摘術後であった。全例が出血歴を有し、内視鏡所見では

全例 RCsign (+) で、Lg (+) は3例であった。

全例に内視鏡的硬化療法と手術を施行した。硬化療法の回数は1~7回であった。手術のうちわけは Hassab 手術4例、shunt 手術3例、胃上部切除術1例であった。全例止血しえたが、2例肝不全死し、他の6例は社会復帰している。

結語 肝予備能不良例、他の合併疾患を有する例、胃全摘術後例で内視鏡的硬化療法にて止血困難な症例には、Hassab 手術、胃上部切除術、shunt 手術を追加する combined therapy が有効であった。

17) 特異な経過をとった総胆管結石症の1例

土田 正則・新田 恵也 (村上病院外科)
村山 裕一・清水 春夫

症例は80歳男性で上腹部痛、発熱にて来院、血液検査及び超音波検査にて胆管結石にともなった急性膵炎と診断したが、4日後には症状の消失にともない肝外性の嚢胞を認めた。これは総胆管結石が嵌頓したために肝外側区域枝が破裂し、胆汁が漏出し嚢胞が形成されたものと診断し、ERCPにより胆管と嚢胞の交通を確認し手術を行った。文献的には肝臓の外傷や手術、PTCなどの外科的操作の後に漏出した胆汁が希に腹腔内に広がらず胆汁性の嚢胞が形成されることが報告されている。1979年 Gould, Patelはこの様な肝外性の嚢胞を Biloma としているが、この概念に当てはまる症例を検索すると29例であり、そのほとんどが外傷、PTC後に発生しており、これ以外の原因で発生したものは Zegel らによる胆嚢癌の胆嚢穿孔と石橋らによる胆管癌の左肝内胆管破裂の2例のみであった。総胆管結石に合併した胆汁性嚢胞の報告はなく、本症例は極めて希な症例である。

18) 経皮的胆管ドレナージの一次的内瘻化について

斎藤 英樹・丸田 宥吉 (新潟市民病院 第一外科)
何 汝朝 (同 消化器科)

PTCD チューブの内瘻化は通常 PTCD 施行後胆汁うっ滞が改善される一週間以後に行なわれるが、我々は PTCD に引き続いて内瘻化を行なうことを試み、これを一次的内瘻化と呼んでいる。一次的内瘻化の目的は (1) PTCD チューブの胆管外逸脱の予防、(2) 腸肝循環の早期改善、(3) 胆管閉塞の範囲の診断である。使用する内瘻化チューブは HANAKO の 7FrPTCD 留置チューブに先端から 1cm 間隔にラセン形に直径約 1mm の側孔を9個つけたものである。昭和60年1月から昭和

61年12月の2年間に行った超音波誘導法によるPTCDの症例は78例でこのうち36例(46.2%)に一期的内瘻化が可能であった。PTCDチューブの胆管外逸脱率は一期的内瘻化を行なわなかった時期は10.5%であったが、一期的内瘻化を試みるようになってから4.4%に減少した。従来考えられていたよりも一期的内瘻化は容易であり積極的に試みるべきであろう。

19) 膵の solid and cystic acinar cell tumor の1例

齋藤 興信・家田 学 (厚生連中央総合)
八幡 和明・富所 隆 (病院内科)
戸枝 一明・杉山 一教
秋田 真一 (同放射線科)

症例は20才の女性で、貧血の加療中に左季肋部に腫瘤を指摘され入院した。腫瘤は小児頭大で表面平滑、弾性硬で呼吸性移動を認めた。血中、尿中アマラーゼは正常だったが、エラスターゼ1が若干高値で、PFDが減少していた。エコー及びCTで膵体尾部に周囲と明瞭に境界される嚢胞性成分を有する充実性腫瘍を認めた。血管造影上は avascular tumor で、侵蝕像等の悪性所見は無く、膵の良性腫瘍を疑い手術を行った。腫瘍の大きさは11×16×9cmで、断面は充実性成分と嚢胞性成分が混在していた。組織学的に腺房細胞類似の細胞が充実性に増殖し、一部に出血性壊死を伴ない、二次的に嚢胞を形成しており、solid and cystic acinar cell tumor と診断した。

20) 膵嚢胞で、拡大、消失を長期間繰り返し、根治手術を行った慢性アルコール性膵炎の1例

樋口 庄市・斉藤 建吉 (田代消化器科)
山本 賢・田代 成元 (病院)

症例は48歳、男性、主訴は発熱、食欲不振である。既往歴は29歳で十二指腸潰瘍にて胃亜全摘術を受け、45歳で急性膵炎に罹患し内科的治療にて軽快した。現病歴は、昭和59年7月下旬より発熱、食欲不振が出現し、約1ヶ月間で4kgの体重減少を認めた。8月20日、当院受診し精査加療目的にて当院入院となった。尿アマラーゼ20175IU/l、エラスターゼ1 1,649ng/dlと著明に上昇していた。当院入院後、腹部CT、ERCPにて膵嚢胞の診断を得た。外科転科後、嚢胞摘除目的にて開腹術を施行したが、術中に嚢胞が破裂し、外瘻造設術を施行した。その後、2度にわたり膵嚢胞は拡大、縮小を認め、昭和61年12月19日、根治手術を施行した。直径7cmの嚢胞で、組織学的には慢性膵炎による仮性嚢胞であった。

第222回新潟外科集談会

日時 昭和61年4月26日(土)
午後12時30分
会場 医学部第三講堂

一般演題

1) 過去6年間に経験した肝内結石症7例の検討

神谷岳太郎・和田 寛治 (長岡赤十字病院)
小林 清男 (外科)

昭和55年より昭和60年までに経験した肝内結石症例は、男性2例、女性5例の計7例で全胆石手術症例464例の1.5%であり、年齢は40才～66才平均49.6±8.2才であった。いずれも胆管炎症状を繰返し来院、超音波、CT、DICで診断された。胆道系手術の既往のあるものは2例で、術前胆汁ドレナージが2例に施行された。結石の部位は、結石が肝内に限局しているもの2例、肝内外の胆管に認められるもの5例で、左右どちらかの肝内胆管に限局しているもの4例、左右両側に認められたもの3例である。手術術式は、術中可及的に結石の除去を行ない、術後截石用のチューブを挿入しているが、不十分な症例には、肝切除2例、肝切開截石術1例を施行した。3例に遺残結石を認めるが、慢性腎不全で死亡した1例を除き、健在である。肝内結石症に対しては、肝内胆管の狭窄に対する処置と、有効な術後截石ルートの確保が重要で、難治性の本疾患に対して粘り強く対処する必要がある。

2) 巨大肝嚢胞の2例

渡辺 和夫・原 滋郎 (県立小出病院)
大村 康夫 (外科)

肝嚢胞は、比較的稀な疾患であるが、近年、VISG、CT等の画像診断の向上により、日常よく遭遇する疾患となった。

我々は2年間に巨大肝嚢胞2例を経験したので、ここに報告する。

2症例とも腹部膨満を主訴に来院。術前の血液、生化学的検査は異常を認めず、CT、VISG、血管造影等により、術前診断が可能であった。

術中所見では嚢胞内容液は、黄色漿液性で、膿、血液、胆汁混入のない事、又、術中胆管造影にて、胆管系